

紀要

29

滋賀県出土の「丸石」研究ノート小島 孝修(1)

古代における土器製作技術の一側面

—長浜市横山城遺跡出土カマド形土器を中心にして—辻川 哲朗(8)

将棋史研究ノート7

—桂馬と香車の動きと性格—三宅 弘(17)

中世塩津港の開発重田 勉(21)

滋賀県内における遺跡出土の石臼

—集成と地域的特徴の把握—加藤 達夫(27)

将棋史研究ノート7

—桂馬と香車の動きと性格—

三 宅 弘

1. はじめに

将棋というゲームは、インドで発生をして日本に伝わってきたと言われている。その伝搬ルートは中国から朝鮮半島を経由するという考えと、東南アジア経由でタイから伝わったとする考え(大内1986)があるが、近年、銀将の動きからタイを経由して伝わったという考え方が主流である。伝わった時期は6世紀頃という考え方(木村2001)と、10世紀以降とする考え方(増川1977)があり、未だ決定を見ていない。しかし、増川宏一によれば、「盤上遊戯の全般にわたる研究やチェス史に関する国際的な研究組織」による共同作業や討論の結果、「チェス及び将棋類の起源がより明確になった」(増川2013, 15頁)としている。それによれば、チャトランガは「紀元五世紀頃にマウカリ王朝の後継者の宮廷で考案された」(同, 16頁)ということである。但し、本書が新書版であるためか、「多くの研究課題とその論争の経過は省略」(同, 15頁)されており、具体的な根拠等は明示されていない。

将棋というゲームの伝搬を考えるに当たって、私は駒の動きの違いやルールの違いから日本将棋の起源に迫れないものかと考えた。ゲームが伝わる以上、ルールや駒の動き、その形象などに何らかの関連性が見られるはずである。今までに「王将(玉将)」¹⁾(三宅1994)・「金将」(三宅2011)・「銀将」(三宅2013)と見てきたが、王将駒や金将駒の裏に文字が見られないのは中国や朝鮮の将棋(象戯・シャンチーおよび将棋チャンギ)に見られる九宮の影響があるものと考え、敵陣に入り込んで「成る」可能性がない駒であり、銀将駒の動きからはタイのマークルック(もしくはマックルック)の影響が避けられないものであると推測した。

しかしこれまでの小文では、日本へのルーツについて結論めいたものが出せなかった。従って、今後、桂馬、香車、歩兵などの駒を詳細に観察し、外国「将棋」の駒と比較することで再び日本への伝搬ルートのヒントをつかみたいと思う。今回は、まず桂馬と香車について考えてみる。

2. 駒の動きや性格と外国駒との比較

桂馬の動きと性格 桂馬は、非常に変わった動きをする駒で、この動きは他に例を見ない。図1のように1コマ前進した後、左右の斜め前へ1箇所ずつ動き、その場所に効く。盤上の端から2つめに置かれている。従って、1度動くと隣の縦筋に移動する。しかし、後戻りはできない。この駒は他の駒と異なり、目の前の駒を飛び越して効き場所に移動できることである。敵陣の三段目に到達すれば、金将に

「成る」ことができる。ただし、目の前の駒は取ることができない。

外国の桂馬にあたる駒(主に「馬」)の動きと性格 基本的には、すべて日本の桂馬の動きが四方に見られる(4倍の動き)。いわゆる「八方桂」の動きで、駒自体は前進も後退も自在にできる。こちらも目の前の駒を飛び越して効き場所に移動できる。敵陣に至っても「成る」ことはない。また、目の前の駒は取ることができないのは日本の桂馬と同じである。

香車の動きと性格 香車は、前方に端まで効く(図1)。盤上の左右両端に置かれ、敵陣の端までを見通す駒である。1度に1マスずつ、もしくは端まで一気に動いてもよい。ただし桂馬同様後戻りはできない。効き筋にある最初の敵駒を取ることができるが、他の駒を飛び越えることはできない。敵陣3段目に到達すれば金将に「成る」ことができる。

外国の香車にあたる駒(主に「車」)の動きと性格 日本の飛車と同じ動きをする。すなわち、自分の駒を中心に縦横の方向に盤面の端まで動く。いわゆる「十字飛車」と呼ばれる動きで、前進後退ともに可能である。日本の香車の2倍の動きが可能となる。こちらも、効き筋にある最初の敵駒を取ることができるが、他の駒を飛び越えることはできない。敵陣に至っても「成る」ことはない。

3. 桂馬と香車の出土例(表1)

桂馬は17遺跡から38枚が出土している。現在最古の出土例である奈良県興福寺旧境内遺跡からは、天喜六(1058)年とされる駒が1枚出土している。最多は180枚の将棋駒が出土した福井県一乗谷朝倉氏館遺跡から15枚出土している。

香車は10遺跡から29枚が確認されている。最も古い香車の出土例は岩手県中尊寺境内金剛院跡から、12世紀前葉(あるいは13世紀頃)の駒が1枚出土している。香車は、鎌倉時代以前の出土例が少なく、上記以外は1323年頃に沈んだとされる韓国新安沖海底船から3枚見られるのみである。最多は桂馬と同じく福井県一乗谷朝倉氏館遺跡から17枚が出土している。

桂馬は、中世に貴族の間で盛んに指されていた中将棋には見られない駒であるにもかかわらず、香車より出土例が多いのは不思議であるといえる。桂馬・香車ともに、16世紀以降と考えられる遺跡からの出土例が多いことが挙げられる。将棋駒全体の出土遺跡を見ると、この頃に城跡からの出土例が増えているため、おそらくこの頃に武士の間に

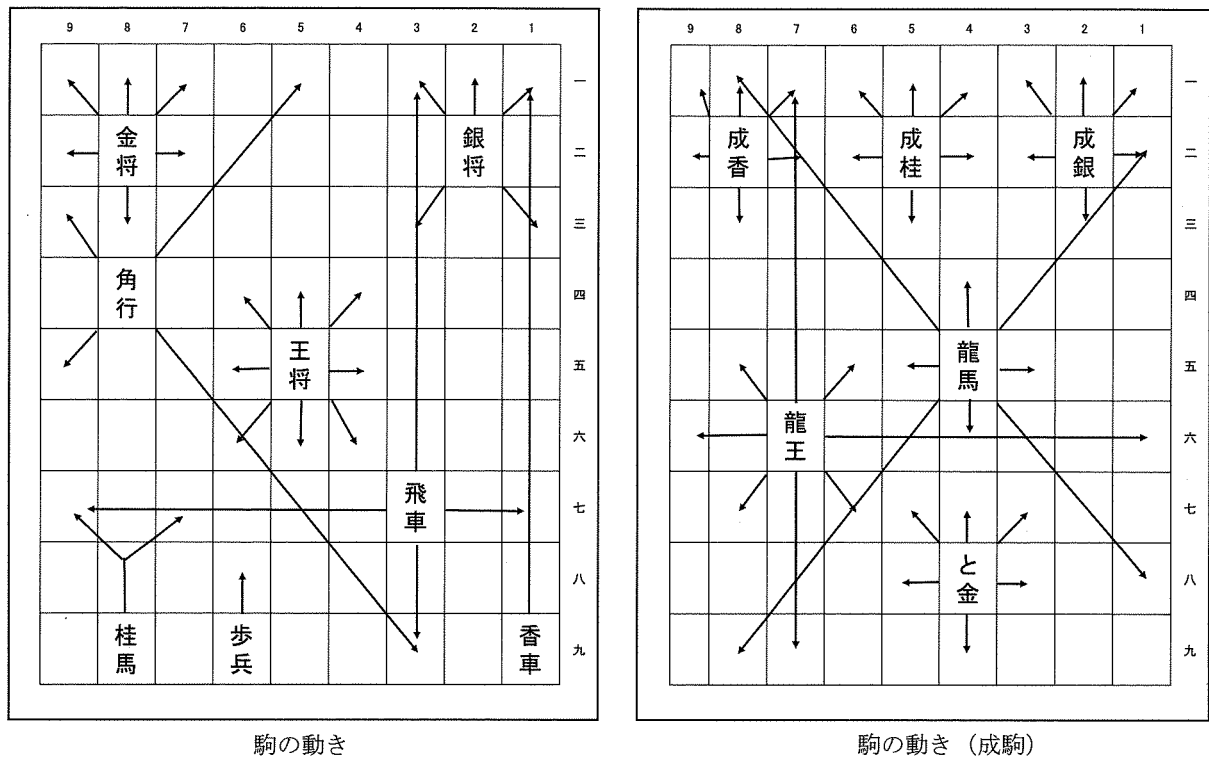


図1 駒の動き

表1 桂馬・香車駒の出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	時期	桂馬	香車	合計	備考
興福寺旧境内	奈良県	天喜六(1058)年	1		1	「酔象・金将・歩兵」と「歩兵」の書かれた墨書木札
中尊寺境内金剛院	岩手県	12c前葉(13c?)	2	1	3	「歩兵・歩兵」の書かれた墨書木札
玉津田中	兵庫県	13c初	1		1	
安養寺	三重県	鎌倉中期	2		2	
大楯	山形県	鎌倉頃	1		1	
新安沖海底船	大韓民国	1323年頃	2	3	5	沈没船中より発見
観音寺城下町	滋賀県	16c中頃	2		2	
一乗谷朝倉氏館	福井県	1567年下限	15	17	32	酔象1・不明36・「王将」の墨書木札
平城京左京三条三坊三坪	奈良県	15c~16c後半	1		1	
赤堀城	三重県	1584年以前	1		1	
大坂城	大阪府	16c頃	1	1	2	
手取清水	秋田県	中世	1		1	
大坂城	大阪府	16c末		1	1	
坂本	滋賀県	16c末		1	1	
大坂城	大阪府	1615年~22年	1		1	
特別名勝兼六園	石川県	17世紀第1四半期	1		1	
港区愛宕下 Na.149	東京都	寛永9(1632)年頃		1	1	
三社町	石川県	17c中頃~後半		1	1	
高槻城三ノ丸	大阪府	18c末~19c初	4	2	6	麒麟1・横行1・堅行1・不明11
名古屋城三ノ丸	愛知県	江戸	1		1	瀬戸焼
大坂城	大阪府	江戸	1	1	2	
			38	29	67	

将棋が流行りだしたのであろう。

4. まとめ

以上、両駒の動きと性格を見比べてみると、海外駒に比べて日本の駒は動ける範囲が圧倒的に少ないことがわかるであろう。桂馬で1/4、香車で1/2に動きが縮小されている。両駒は現在の日本のルールでは、最小手数で考えると4手で王手ができ、5手目で敵玉が「取れる」状態になる。これは、両駒が「成れる」からであり、日本将棋の駒はほとんどが「成る」権利を有している。また、海外の駒は最も動きの弱い「歩兵」に相当する駒のみ敵陣で「成る」ことが認められている。桂馬、香車の両駒ともに成らなければ定位置にいる王に「王手」をかけられないし、敵陣の奥まで行き着いてしまった後は使いようのない駒になる。いわば、「成り」が入らなければ何の存在価値もない死に駒になってしまうのである。死に駒の多い将棋はゲームとしての面白味に欠けるし、博打の対象として見ても利用価値が甚だ低いものになってしまう。従って、動きの弱い（行き場のない）駒には「成り」という救済措置が設けられたものと考えられる⁽²⁾。将棋が、現在確認される最古の状態から「成り」が見られるのも、そういったことが理由の一つに挙げられるものと言えるのであろう。

では何故日本の駒は動きが制限されてしまったのであろうか。一つは、桂馬、香車の大本と考えられる駒である「馬」と「車」の性格であろう。動物の馬は主に騎乗に利用されていたものとされるが、桂馬の特異な動きは馬の飛び跳ねる様を模したものと考えられる。馬は乗り手の手綱捌き一つで前後左右に移動可能である。

「車」も主に貴族の乗り物であった牛車など、動物が牽く乗り物として考えられていたのではないか。牛車は前に向かって一直線に突き進むのみの乗り物で、猪のようにイメージされていたようである。こちらは前進のみで左右に動いたり後退などは極めて困難な乗り物であると言わざるをえない。

二つ目には桂馬や香車などの置かれる位置から考えられる。これらの駒は、現在一般的に金将や銀将より低い駒であるとされ、王将から遠い位置に配置されている。駒の名称から見ても、「将」クラスが王将の近辺を守り、「馬」や「車」などの乗り物（もしくは道具）はその外側を占める配置が見られる。そしてそれらの前には「歩兵」が整然と一列に並んでいる。これらは、線上での軍隊の配置と似ており、それ故将棋は戦争ゲームであると認識されているのであるが、何時の世も王に近いところに重要な将校クラスがおり、王から離れるほど下級の兵士が配置されている。王将から遠い桂馬や香車は、扱いの軽い下級の戦力であると考えられ、大きな動きを持たせず動きを制限したものと考えられる⁽³⁾。

また、馬や車は戦で言うところの乗り物の一つであり、

「将」よりも盤面の端に置かれている。「馬」の動ける場所は8箇所であり、「車」は16箇所である。日本将棋の金将は6箇所、銀将は5箇所しか移動場所がないことからすると、両端に置かれた乗り物の動きが大きすぎると考えられたのかも知れない。それ故、桂馬は2箇所、香車は8箇所であるが成らない限り中央へは行けないというように変えられたと思われる。従って桂馬も香車も左右と後方への動きが削られてしまったのではないだろうか。

三つめは、将校クラスの金将や銀将は、王将の周辺を細かく動き回り周囲の情勢に機敏に対応する役目を持っている。その周りに位置する桂馬や香車は、従来大きく動き敵を攻撃する役目を担っていたと考えられるが、動きの大きい「飛び道具」的な駒の存在が4枚あると言うことは、激しい空中戦の結果あまりにも勝負が早くつき過ぎたためのやむを得ない遅延措置ではないだろうか⁽⁴⁾。飛び道具の威力を極力弱めた結果、その代わりに「成り」を与えたものと考えられる。

註

- (1) 現在の呼称は王将・玉将どちらも存在するが、現存最古の興福寺駒では玉将駒であり、従って日本化した当初は玉将であったとする説がある。ちなみに駒の名称も玉金銀など財宝を意識したもので名付けられていたとされている（増川1977）。しかし、最古とされる奈良県・興福寺旧境内出土駒の1058年より少し新しい富山県・石名田木舟遺跡第2次調査（11～12世紀）や大阪府・上清滝遺跡（1184年頃）、京都府・鳥羽離宮跡第135次調査（1203年頃）で王将駒が出土している。また、玉将駒は島根県・富田城新宮堂館跡から1554年以前と見られる駒まで、その間1枚も見つかっていない。これは今後の出土例によっても変化するが、少なくとも現在のところ伝来当初から玉将であったのか、両方存在したのかのいずれかの可能性を残している。従って、とりあえず従来から一般的に言われている「王将」の呼称を使用する。
- (2) この考え方は、将棋というゲームをより複雑に面白くするために必要な考え方であり、いずれ駒の再使用に行き着く。
- (3) 将棋の駒に階級差をみる考えは、現在でも打ち歩詰めに現れている。すなわち、敵の王将を歩兵を打って詰ますことはできない。
- (4) 現在の将棋でも、飛び道具的な駒は、飛車と角行の2枚のみである。つまり、将棋というゲームは、勝負が早くつきすぎても良くないし、つかなすぎても良くないという、両者の微妙なバランスの上に成り立っているものと言える。

文献（著者名・機関名50音順、刊行年順）

- 大内延介（1986）『将棋の来た道 タイ編1・2』めこん
 木村義徳（2001）『持ち駒使用の謎 日本将棋の起源』日本将棋連盟
 増川宏一（1977）『将棋Ⅰ』（ものと人間の文化史23）法政大学出版局
 増川宏一（2013）『将棋の歴史』（平凡社新書670）平凡社
 三宅 弘（1994）「将棋史研究ノート（4）～王将と玉将～」『滋賀文化財だより』No.200、財団法人滋賀県文化財保護協会
 三宅 弘（2011）「将棋史研究ノート（5）金将の役割～金将の動

きと配置から～』『紀要』24, 財団法人滋賀県文化財保護協会
三宅 弘（2013）「将棋史研究ノート（6）銀将の存在」『紀要』
26, 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
（みやけ ひろし：企画調査課 副主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.29 2016.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages